ニュージーランド
－豊かな自然と動物を愛護する国－

札幌市医師会　門脇　純一

ニュージーランド（NZ）へ旅するのは初めてである。旅を終えて、この国の印象を短くと問われるとすると、題名の副題のように感じた。それに、多くの顔を持つ自然の美しさを加えたい。

わが国とNZとは、赤道を挟んで南北を対称に位置しており、細長い国の形もよく似ている。ただ、人口比率となると、2001年の調査でNZは347万人というので、わが国の24分の１となる。これに対し、羊は４千万頭以上と多い。

NZの気候は南半球に存在していることから、わが国と全く逆となり、１年で最も暑いのは１、２月となる。この国の夏、冬の気温差はあまり高低がなく、むしろ１日の寒暖差が大きく、１日のなかに四季があるといわれている。

NZの街はオークランドのダウンタウンを例外として、クライストチャーチほどの大きな街でも、歩行者はゆったりと、生活をエンジョイしているようにみえる。これは、私個人のひがみも加担してるかもしれない。さすが、人口の多い最近の北京、上海、わが国の大都会の喧騒とは、縁遠い。

ここで、この国の象徴、代表的愛称などにつき触れてみたい。キウイ（Kiwi）は、大多数の日本人にとってフルーツとして知られている。褐色の有毛の肌で緑色の果実は口にしたことがある人が多い。ところが、同じ名前で飛べない鳥となると知ってる人は少し減り、これが国鳥となっている。

キウイハズバンドとなると、知る人はいっそう減少する。この呼称は家庭の仕事に協力的なご主人に用いられており、拡大してNZの男性にまで指すことがあるという。驚いた。このことで、私の頭の図書室の一角が拡張した。

飛べない鳥タカヘ（Takahe）というのも、テイアナウ・ワイルドライフ・センターでみせてもらった。テイアナウ洞窟のツチボタルはあまりにも有名で、天空の星のきらめきをみるようであった。

フィヨルドランドへ向かう山岳路を下降する途中で、ケア（Kea）というオウムの一種に会う機会にも恵まれた。何たる幸運よ、ガイドのお嬢さんが叫んだ。ラッキー。この鳥、大変いたずら好きで好奇心が強く、人が数メートルまで近づいても逃げようとしない。ゆうゆうと、餌をついばんでいた。人間の作った法；保護鳥に溺れすぎてはいませんか。ふと、苦笑いした。

通過途上でみられたマウントクック山（3,754ｍ）は残念ながら、頂上の３分の１は雲に覆われ、全容は眼底に収められなかった。全姿を現すのは、年に半分もあるかときいた。期待の航空遊覧は、希望者が満たされないため中止となった。

旅行のなかで、最も期待と注目を集めていたフィヨルドランド国立公園のミルフォードサウンドは一面快晴で、この時ばかりは誰しもなんと幸福なことよ、無宗教の人も天の神に感謝した。

氷雪を抱いた高山を背景に長く落下してくる滝、船が近づくと、細かな水滴が飛散し顔面を濡らした。角度と場所によっては、七色の虹を形成して見せてくれた。

ついてる時というのは、こんなにも上手なお膳だてができるのかと思われるほど、舞台ができるものである。船首、船腹にイルカが現れ、数分間も同行、遊んでくれた。10数メートル前方の岩には、４頭のオットセイがゆったり日向ぼっこをしているのも見えた。しかし、鯨はとうとう、見る

ことができなかった。

滝には、フォール（Fall）とカスケード（Cascade）があるが、前者は降った雨がたまって滝を形成しているもので、後者はフィヨルドの氷河が溶けてできたものと、説明されたが、一般的に通用するかどうか疑問が残る。ただ、カスケードは、実験や化学の代謝過程の図でよく見、聞き慣れていた。

シダのある種は国の代表的植物で、有名なラグビーチーム；オールブラックスの愛称マークになっている。

マヌカ（MANUKA）ハニーは医療者にとっては特に興味のある健康商品として、力をいれ宣伝されている。このハチミツはNZに原生するマヌカの木の花から集められたもので、強力な抗菌作用があり、ピロリ菌にも有効と科学誌に報告されているという。マオリ族は昔から使っていたそうである。

このように美しいNZであるだけに、自然環境破壊には特に注意が払われている。トランピング（トレッキング）は盛んで、人気がある。海に囲まれ、湖の多い国だけにカヌー、カヤックが好まれ、オークランドでは6軒に1艘の割合でヨットがあり、それは世界一という。丘の上からみるヨットハーバーは、それは見事なものである。

NZの国旗はロイヤルブルーの地に英国連邦の一員を象徴するユニオンジャック、そして南十字を形どった4つの星からなっている。帰路のオークランドのホテル出発は早朝の5時50分で、まだ暗く、ガイドさんの説明による空の南十字星の位置を確認し、満足して発つことができた。

ベスランの怒り

札幌市医師会
札幌北楡病院　川村　明夫

1年前、ロシアの南部、北オセチア共和国ベスランでのチェチェン独立主義者による学校占拠事件において、多くの子供がテロの犠牲になったことはまだ記憶に新らしい。

モスクワ空港に降り立つと9月の始めだというのに肌寒い。10時間前は東京でうだるほどの暑さだったのに。小雨が降っている。たくさんの人々で大混雑だ。“タクシーに乗るのかと”、怪しげな人物が次から次へとあらわれる。無視、無視、無視。空港の表玄関とおもわしき方向、すなわち“出口ーEXIT”に向かう。出口から外に出るが、バスもいなければタクシーもいない。出口が違うのかと、もう一度館内に入る。何度眺めても出口はここしかない。再度、出口に向かう。やはり交通機関はなにもない。地下鉄はあるが自信がない。そうこうするうちに例のタクシー案内係が現われる。ええい、しょうがないと腹を決め値段交渉に入る。20ドル見当で交渉した。しかし、敵は40ドルという。それでは乗らないとねばる。結局、30ドルで交渉妥結。案内人が携帯電話で連絡をとる。待つことしばし、タクシーが到着。車はLADAか何か国産車だ。大分中古であるが運転手は若い。誠実そうな人物でとりあえず安心して乗車。空港広場を出るとたくさんのタクシーが待機している。ここから、呼ばれた車が順次タクシー乗り場に現われ客を乗せることになっているようだ。後で判ったがテロ対策のようだ。平和ボケのわれわれには咄嗟にピンとこない。運転手に行く先のホテルを示す。分ったと合図する。平坦な高速道路らしき道路が続く。20分くらい走る。20年前に訪れた時は道路の両側は緑豊かであったと思うが。当時は2ドルと外国タバコ1箱であったような記憶だが。5ドルだったかもしれない。高速道路も終わるが道幅は広い。人々がタイミングをみて横断する。片側3車線である。森ではなく住宅地と時々商店がある。空港からモスクワ市内は南東にある。40分くらいか、赤の広場の近くを通り、モスクワ川の橋を渡った南岸にホテルはあった。バルシャング・ケンピンスキー、高級ホテルである。翌日は遅くにモスクワからポーランドのワルシャワに向かうので、ホテルを奮発した。搭乗機はあの有名なエアロフロート。60歳以上だとビジネスに大幅な値引きがある。因みに、東京ー

ワルシャワ往復で25万円である。

空は曇よりしているが、部分的に晴れている。午後6時、ホテルを出てモスクワ川の南、すなわち赤の広場から場末に向かう。もちろん、夕食にありつくためだ。周囲は運河になっている。食事をするような店は少ない。全体に地味だ。しかし、私はレストランではなく庶民の食事処を探している。ロシア文字は読めないし、言葉も知らない。しばらく散歩をしながら人の出入りがある扉をみつけた。隙間から中を垣間見ると食堂だ。安っぽくて、私の望んでいるところである。大方のテーブルはうまっていた。入り口の右に空いているテーブルがあった。4席のテーブルであるが、一人で占拠する。奥にカウンターがありその左側にショーケースがある。ここには料理が並んでいる。これは言葉のできないものに都合が良い。生ニシンの酢漬け。玉ねぎのスライスがたっぷりかかっている。パンもついている。これはロシアでかねてから食べたいと思っていた一品である。そして、肉厚のゆでたパプリカを半分に切り、生チーズをたっぷり盛った皿も追加。ビールを500ml飲む、うまい。ビールと料理を追加しようとしたが、待てよ、もう一軒はしごはどうだ。外はまだ明るい。4、5軒先に同じような食堂か居酒屋と思しきところがある。一軒目で度胸がついているのでズイとはいる。ここでは皆さん茹でた子エビをテーブルに楽しくやっている。ウオッカやワイン、ビールがテーブルにある。ビールはEfesがある。エフェスはトルコの地中海岸、ギリシャ時代からローマ時代に狩猟の女神、アルテミスに捧げられた港である。当時はエフェソス。以前訪れたことがある。もちろんここのビールではないが、トルコはロシアの隣国、強敵である。しかし、美味いものはどこ製でもかまわない。エビは大、中、小の盛りがあるようだ。中をたのむ。ビールはエフェス、さらにウオッカを一杯。これで完璧だ。最初の店は95ルーブル、2軒目は105ルーブル。しめて邦貨で800円。東京丸の内近辺でこの値段です。先ほどのタクシー、外国人と接触する部分は値が張る。しかし、庶民相手となるとその国の資本規模に一致している。私が感激するのもお許しいただけると存じます。ホテルまではすぐ。モスクワ川の岸から赤の広場を見る。まさに暮れなんとし、広場の塔は残照に一部を残している。

翌、2005年9月7日、降ったり止んだり、雲が重く垂れ込めている。赤の広場を訪れたが、中央には入れない。交通規制が敷かれている。今日はベスラン人質犠牲への抗議デモがあるという。赤の広場はあきらめてグム百貨店に入る。むかし訪れた時と違い大変アカ抜けている。中央の長い廊下にはたくさんの椅子とテーブルがあり、ケーキ店がコーヒーショップを兼ねている。ケーキは少し大きいが精錬された味だ。ハーブティーも良かった。昨日から眼鏡のレンズが落ちそうになっている。大きな眼鏡店に入った。きれいな女子店員がたくさんいる。修理を頼むとすぐに応じてくれた。お金はと訊くと、愛想良く、要らないと言う。店員みんな感じが良い。共産党時代からの変わりよう。良いことだ。雨は降り続いている。赤の広場に向かうと、そろそろ人が集まっている。午後3時には数千人規模にふくれた。皆、プラカードの下を静かに歩いている。激しい叫び、シュプレヒコールなどはない。犠牲者を悼んでいる姿がよく分る。それだけ、心のうちの怒りは激しいのだろう。抗議と哀悼の行列は遅くまで続いた。

帰国後、わが国のリベラルを称するマスメディアの報道を目にした。チェチェン独立主義者にも理解を示していた。ロシアのプーチン大統領が強権で悪いとの論調である。プーチン大統領が強権であろうと、スパイを送り込もうと、子供を人質にとり命を犠牲にするなど言語道断である。最近もイスラム武装勢力に理解を示すような論調がみられる。ポーランドでも英字新聞を読んだが、世界の人々はベスランのテロを激しく憎み、抗議している。しかし、わが国民は物事をはっきりさせるのが嫌いで、双方の顔を立て、あいまい決着を図るのが民主主義であると考えているようだ。

ベスランの怒りを忘れてはならない。

ヨーロッパ碁コングレスに参加して

十勝医師会
新得診療所　杉目　正尚

ヨーロッパ囲碁コングレス・プラハ大会に出場してきた。ヨーロッパの囲碁愛好者は年々増加し、現在約4,000人と言われている。コングレスは今年で49回目、毎年7月末から2週間、欧州の何処かの国で開かれている。昨年はポーランドのツホーラ、来年はローマの予定。参加者はアマ20級から7段までにプロ17名を含め約900名。日本から90人、韓国・中国から70人、南北アメリカからはごくわずかで、ほとんどがヨーロッパ各地からの参加だ。欧州人の合理的な考えでテニスやゴルフと同じようにプロアマオープンとして縦一列のランキングをつけようというものだ。もちろんプロの参加が少ないのは賞金が無いからだ。

会場はプラハ工科大学、宿泊は夏休みの学生寮。朝食から深夜までキャンパス内のレストランやパブで全てまかなえるし、周辺には飲食店やスーパーもある。それらをはしごしているうちに気持ちはすっかり学生時代に戻っていた。ロビー、中庭、パブ、至るところで碁盤が開かれ深夜までいろいろな言葉が飛び交っていた。

メインのランキング戦は全10試合、持ち時間各120分、毎日10時から1局だけ打つ、とてものんびりした大会だ。2週間の期間のうち試合のない日が数日あり、そこで短期決戦の小大会、子供大会、ペア戦、コンピューター同士の試合などがあった。また、試合の無い日や本戦後の時間を利用した交流会、小旅行などの企画が盛りだくさんで退屈な時間はなかった。企画のひとつに『囲碁文化を語ろう』というフォーラムがあったのには驚いた。

プラハ旧市街は『百塔の街』といわれ、そっくり世界遺産となっている。かつてドボルザークも歩いたといわれる石畳を毎日のように散歩した。室内楽コンサートで対局後の心を鎮め、カフェで何時までもモルダウの流れを眺め、とても贅沢な時間を過ごした。

対局風景

右側は筆者

昨年お世話になったマドリッド囲碁クラブからも松浦潤子氏ら数名の参加があり再会を喜んだ。余談だが松浦氏は釧路市出身で、2001年北大医学部卒、国試合格後単身渡欧、昨年スペインの国試に合格し、現在マドリッドの病院で研修中である。スペインでは研修医も他の職員と変わらず年間60日程の有給休暇がとれるようだ。その代わりすべての新人医師に4年間のローテート研修が義務付けられているとのことである。

1週間だけとか週末土日だけの参加も多く、やはり欧州にも忙しい人はいるんだと感心、私も8日間の参加だった。夏恒例の格安旅行というか、夏休み囲碁合宿という感じで毎年必ず参加している人たちがたくさんいた。

碁コングレス参加者は若い人が多く、女性も目立つ。彼らはとにかく礼儀正しく碁に対する姿勢が真摯である。受付時に参加者全員にルールブックと10局分記録できる白棋譜が渡される。対局中

ほぼ全員が棋譜をとっていた。午後、数箇所でプロによる検討会が開かれ、そこに今終わったばかりの棋譜を持ち込んで検討してもらうのだ。私も順番を待って皆の前で教えてもらった。これは上達を目指すものにとって理想的な方法だ。このチャンスを逃さず彼らはこの2週間で確実に1目上達して帰るであろう。

さて、ヨーロッパオープンの例に従って私は3段で登録し試合に臨んだ。メインは3勝2敗5棄権、またウィークエンド小大会では3勝1敗だった。一部トップクラスの選手を除いて、勝負というよりは研鑽と親善が目的という参加者がほとんどだ。

それはそれは楽しい日々で私はすっかりはまってしまった。

お知らせ

理　　堂（関場不二彦先生）生誕百四十周年記念講演会のご案内

北海道医師会、札幌市医師会の初代会長であり、札幌社会保険総合病院の前身である「北辰病院」の創設者でもありました関場不二彦先生の生誕140年を記念して、下記により記念講演が開催されることとなりましたので、ご案内いたします。

記

開催日：平成17年11月7日（月）　午後6時～
場　所：札幌社会保険総合病院　2階　講義室
　　札幌市厚別区厚別中央2条6丁目2－1

記念講演

司会　札幌社会保険総合病院　院長　秦　温信
「関場不二彦先生に学んだこと」
講師　日本医史学会　評議員　島田保久先生

※講演会終了後、地下1階「はまなす」にて情報交換会を予定しております。

■関場不二彦先生記念パネル展
11月5日㈯～11日㈮　札幌社会保険総合病院　1階　エントランスホール
後援　北海道医史学研究会

お問い合わせは、札幌社会保険総合病院　図書室　篠原（☎011-893-6313）まで。
この講演は「北海道医師会認定生涯教育講座」(3単位）申請中です。